

学術人類館事件と文化人類学

池田光穂

今からちょうど 118 年前の 1903 年 3 月に第五回内国勸業博覧会の開催にあわせて開館した学術人類館（館主：西田正俊, 1867-1930）の「異邦の人たち」を生きたまま展示したことについて、私が大学教員として長年学生を教育してきた経験から、人権と学術研究と興行(entertainment)の関係について論じてみたいと思います。なお私の意見は、これまで私の文化人類学者としての経験と反省にもとづく現在の偽らざる見解であり、私の所属する大学や学会の立場を表明するものではありません。

さて学術人類館の人権問題については、様々な識者が様々な観点からこれまで論じており、とりわけ琉球人への差別については、松田京子『帝国の視線』2003 年、また、松田さんの講演も収録されている、演劇「人類館」上演を実現させる会編『人類館：封印された扉』2005 年などに詳細にまとめられており、私はそれらの資料に完全に依拠しています。

学術人類館事件が今日の私たちにもたらすものは次の 3 点に集約できると思います。すなわち 1. 「異邦の人たち」をモノ化すること、2. 「異邦の人たち」とは誰か、3. 研究者とスポンサーの倫理的な関係、の 3 点です。

まず第 1 点：「異邦の人たち」をモノ化すること。今日の倫理観に照らし合わせれば、人間を生きたまま展示することの非人道性は言うまでもありません。しかしながら、文化人類学者がコミュニティに住み込み相手の社会を描写するエスノグラフィーという科学的手法も「人類文化の理解のためになる」ということで、このような「ありのままの記述」と、それを「人類学者の肩越し」にのぞいてみたいという同業者や学生という読者の欲望充足に貢献している点では変わりません。ただ、エスノグラフィーが人間博物館と倫理的に異なる点は、プライバシーに配慮した匿名化やインフォームドコンセントという手続きを通して、その成果を調査対象となる人と共有しようとするという違いでしかありません。すなわち、後者は手続きにより倫理性が担保されているだけで、他者のイメージを売り渡す（＝ブローケージする）ということで「モノ化」にまつわる倫理性はともに永久に問われ続けられます。

第 2 点目：「異邦の人たち」とは誰か。学術人類館事件では太田朝敷（ちょうふ）による雄弁な抗議の中で、アイヌや生蕃と同列にしたということに怒ったという、沖縄人のヤマトへの同化主義的主張（＝日琉同祖的なナショナリズム的言説）は、琉球の先住性の尊重とともに他の先住民

族と連帯する運動にとっては結果的に有害で障がいになる主張になったということ。この発話の冒頭で私が「異邦の人を生きのまま展示」したという「異邦」に琉球が含まれていることへの抗議です。また同時に、琉球文化の代表として「手踊り」をする「娼妓」という女性であったことが、職業や性差別を前提にした沖縄の自文化を代表するものではないという怒りに繋がったこと。これは今日でも国際的に問題になっている戦争や内戦状況におけるジェンダー差別や性虐待の議論に繋がっていきます。この両方の問題は19年後に作家・久志美沙子(くし・ふさこ、1903-1986; 久志ツル)の小説「滅びゆく琉球女の手記」『婦人公論』昭和7(1932)年6月号での「京浜沖縄県学生会」からの(ここでの他者はアイヌと朝鮮人)抗議と連載中止事件と、久志の「釈明文」『青い海』昭和7年7月号の発表により不運な終焉を迎えます*。そこで「妾のような無教養な女」である久志は、民族的マイノリティを差別し同化主義を貫く朝敵的な立場を批判しつつ、琉球の女性に対する差別を表面させまいとする「社会的地位を獲得」した学生会の権力に抵抗しない「卑屈な態度」を静かに批判します。つまり少数民族も女性も、同じ邦にいなながらも「異邦の人たち」と認定されたり、いや同胞なんだと勝手に「権力をもった人たち」から包摂されたり排除されたりします。言い換えると「異邦の人たち」とは自己決定権や自律性 (autonomy) を持たない人のことをさします。

そして最後の第3点目：研究者とスポンサーの倫理的な関係。それは興行としての人類館を成功させようとする大阪の企業家の西田正俊(にしだ・せいしゅん、1867-1930)と、そのプロジェクトに相乗り(タダ乗り?)して学術としての人類学のプレゼンスを高めようとする坪井正五郎(1863-1913)と松村瞭(1880-1936)の思惑についてです。人間展示は、多くの研究者が発起人である西田の独自のアイデアではなく、パリ万博(1889)で「野蛮未開人種」の展示に興味を惹かれた坪井が持ちかけたのではないかとされています。開設趣意書はその年の1月に出ているために前年の1902年末には具体的な構想はすでにできあがっていたのでしょう。3月には坪井の世界人種地図が掲載され、東大の人類学教室から関連する展示品が搬入されます。開始前から展示される民族などが発表されていたために、さまざまな抗議の火があがります。その矢面に立った

* 先行する類似の筆禍事件としては「さまよへる琉球人」事件がある。これは広津和郎「さまよへる琉球人」『中央公論』大正15(1926)年3月発刊後に「沖縄青年同盟」が報知新聞上において沖縄県人への差別を助長すると抗議し、広津はそれを二次媒体として公表することなく1968年に死去したことである。広津没後2年に、この小説は沖縄タイムス(1970.08.16)は山里景春編集『新沖縄文学』17号(1970年8月)に再掲される。広津の小説では主人公が沖縄出身の行商人と仲良くなり、その私的な交流の中で騙されつつも行商人の口から語られる沖縄の悲惨さのためにそれを赦し、また騙されるという物語が展開する。僕はこのエピソードを聞いた時に、John Richard Schlesinger 監督の映画 *Midnight Cowboy* (1969)の物語や、グアテマラ高地でフィールドワークの最中に知り合った気さくな先住民の行商人たち (*ambulantes*) との出会いを思い起こす。僕たちは「理想的な言語共同体」の中ではなく、いろいろなタイプの社会的不平等の中でしか出会うことができないし、対話的理性が社会問題の万能薬 (panacea) でもないことも知っている。

のが西田ですが、回顧録にもその多くを語りません。他方、坪井正五郎は往時を振り返り、抗議があったのは展示の規模が小さく体系的に示すことができなかつたからだ、つまり、啓蒙が不十分だからだと説明します。坪井は、この問題の本質を問うことなく逃げているのではないか、否認しているのではないかと推察されます。このような否認行為は、自己反省を失った学問がもつ、構造的暴力の一種であると、私は考えます。

残念ながら坪井の説明は、今日の私たち研究者にとっても何ら驚くべきことでありません。現在でも、研究の危険性について批判を浴びるとき、学者たちの言い訳でもっとも多いのが「市井の人たちは研究に対する理解が浅いから反発するのだ」と、常套句のように言挙げすることです。学者たちは、「なぜ市井の人たちが自分たちの研究に抗議の声をあげるのか？反発するのか？その理由は何か？」と深く考える習慣がありません。ただし、そのような悪弊の横溢を極度に一般化して「学問の暴力」性だというまとめ方は、私は感心しません。もし、ある学者が同業者にそのようなことを決めつけるのであれば、その先生もまた学問をしているわけですから、自分の「学問の暴力」性に自覚しないとタコが自分の脚を食べるような虚しさを感じます。自分自身の学問も含めて構造的な暴力性をいかに軽減するのか、消滅させるのかという対案を出さないかぎり、私はその同業の批判者の主張を簡単には信じないでしょう。

学術人類館事件は、琉球の人たちには、まず琉球人を展示するという暴力性に気づかされることでしょう。しかしながら、その怒りは太田朝敷流のヤマトナショナリズムの変奏に回収されるという落とし穴があるでしょう。久志美沙子は上掲の筆禍事件で筆を折ったそうで没後に、さまざまな女性たちよりその記憶呼び起こされ、ようやく再評価されるに至りました。学問の暴力性を体現している坪井は久志とは異なり反面教師のほうになりますが、もし「学術は無傷でプロデューサーの西田に責任があるのだ」という言い訳が、現在のどこかしこでも見つけられるのであれば、襟を正すどころか、根源的に反省しなければなりません。すなわち私たち大学人にも、大先達＝大先輩である坪井正五郎の過失を見つめなおし、有効な対案をみなさんに提示する時が熟したようです。

ご静聴ありがとうございました。

(コメント：第二回琉球人骨返還問題に関する「対話」シンポジウム「チャースガ！『学術人類館事件』いま、その意味を改めて問う」於：沖縄県立博物館・美術館講堂、2021年3月21日)